

「食育セミナー」概要報告 ～農業体験をとおして食を考えてみませんか！！～

- セミナー名 食育セミナー
～農業体験をとおして食を考えてみませんか！！～
- 日 時 2013年11月 8日(金) 13:30～16:00
- 開催場所 広島合同庁舎2号館6階共用第7会議室
- 主 催 農林水産省中国四国農政局広島地域センター
- 対 象 者 食育実践者及び食育に興味のある方
- 参加者数 60名
- 参加費 無料



食育セミナーチラシ

■ 開催の趣旨(開催要領より引用)

平成23年3月に策定された「第2次食育推進基本計画」では、「周知」から「実践」をコンセプトに、新たな推進目標として「農林漁業体験をした国民の割合の増加」が掲げられています。また、「攻めの農林水産業」の推進を踏まえた食育の推進を展開していくためにも、農林漁業体験等により消費者の方々に食や農林水産業への総合的な理解を深めていただくことが重要です。このため、広島地域センターでは、農林漁業体験活動の趣旨等や具体的な取組事例を幅広く消費者の方々にお知らせし、農業漁業体験活動を推進していくことを目的として「食育セミナー」を開催します。

■ 議事次第

- | | | |
|---|---|-------------|
| 1 | 開 会 (5分)
あいさつ 中国四国農政局広島地域センター長 石井 一成 | 13:30～13:35 |
| 2 | 基調講演「食と農を結ぶ農業体験学習」(60分)
～食農教育の重要性～
【講演者】 藤木 豊氏(日本大学法学部 非常勤講師) | 13:35～14:35 |
| | (休 憩) | 14:35～14:45 |
| 3 | 事例発表「今、『体験する』ということ」(30分)
【発表者】 浦田 愛氏(ふるさと自然体験塾 塾長) | 14:45～15:15 |
| 4 | 意見交換(45分) | 15:15～16:00 |
| 5 | 閉 会 | 16:00 |

■ 当日の様子（写真）

《センター長あいさつ》



あいさつ（石井広島地域センター長）

《講演の様子》



講演（日本大学非常勤講師 蕪木氏）



講演の様子



講演（ふるさと自然体験塾
塾長 浦田氏）



講演の様子

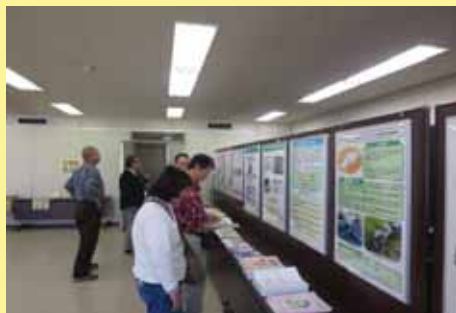


講演の様子

《展示コーナー》



セミナー開始前の展示コーナー



セミナー開始前の展示コーナー



セミナー開始前の展示コーナー



セミナー開始前の展示コーナー



昔の農機具コーナー



昔の農機具コーナー

《意見交換》



質問をする来場者の方①



質問をする来場者の方②



質問に答える蕪木氏



質問に答える浦田氏

講演 「食と農を結ぶ農業体験学習」
～食農教育の重要性～

講師：蕪木 豊 氏
日本大学法学部 非常勤講師



【プロフィール】

公立高校の学校長や埼玉県のエデュケーション行政に長く携わり、現在は、日本大学法学部の非常勤講師や食農教育ネットワークアドバイザーとして活躍。

人間が生きていく上で最も基本となる「食」の大切さと、その食がどのように作られているかの「農」について、体験的学習の中から理解させることの必要性について考えていく。

蕪木氏 講演の概要

～はじめに～

教育界が学力低下の問題で、どうすれば学力を上げられるかということに力を入れている中で、私は小学校や中学校に農業体験学習を取り入れて下さいと話をしています。小学校では、9割から9割5分程度が農業体験学習をやっていますが、中学校は全国的には3割から3割5分くらいです。中学校に農業体験をやってくださいと言うと、そんな時間はない、それより1点でも学力をつけてやりたいと言われます。ですから私は中学生に農業体験をさせることをライフワークにしています。

また、子どもたちに汗水垂らして少しでも良いものを作っていくことの大切さをわからせていきたいと思っています。日本人の人間力、人間の品性が落ちている中で、学校教育で大切なのは人物を作る、芯のある人間を作るということに、教育界も社会もこぞって焦点を当てていかないとはいけません。今日お話する食農教育の究極にあるものはそこだと私は考えております。

1 子どもたちをめぐる状況

(1) 学校教育の中で

今、学校教育の場ではどんなことが起こっているか、チャイルドラインという子どもたちの悩みを聞く電話相談センターがあります。そこへ届けられた3人の子どもたちの話を読ませていただきます。

1人目は小学校6年生の男子です。「僕は何もしていないのに、教室で歩いていると足をかけてきて転びそうになっちゃった。背中をバーンと強く投げつけられることだってあるんだよ。この間はお母さんに買ってもらって大事にしていた筆箱を壊された。給食に消しゴムのかすを入れることもある。そんなときは気持ち悪いので食べられなかったよ。」要するにイジメですね。

2人目は中学校1年生の女子です。「仲良かった友達がこの頃私を避けているみたい。悩んでいるんです。みんなで話をしても私が行くと黙ってしまう。この前は他のグループの子が私の悪口を言っているみたいって教えてくれたけど、私は何を言われているのかわからなくて心配で、私は何も悪いことをしていないのに何でだろう。」人間関係、友達関係の悩みです。

3人目は中学校2年生の女子です。「私は修学旅行に行きたくない。どうやったら行かなくて済むかな。グループに分かれて行動するんだけど、グループの中で私だけ友達がいない。一緒にホテルに泊まったりするなんて嫌だ。」人間関係がうまくいかないんですね。

こういうお子さんが非常に多いんです。一口に言えば人間関係の調整力が失われて孤独感を抱えている子どもが多く、全体の3分の1くらいというデータもあります。街へ帰っても外で遊んでいる子どもが非常に少なくなっており、上手に人間関係を結ぶ力が落ちています。どういうことかという、自分の思いをきちんと語れない、言葉の活用能力が落ちていると私は考えています。核家族化の中で色々な人と出会ったり、家庭の中でお話をする機会が限られているんです。言葉が貧しくなって思いがきちんと伝わらない。そういうもどかしさやイライラが子どもたちの中に蔓延しています。

(2) 食生活の問題

小学校4年生の女子です。「パパとママがいなくて、今夜も一人、寂しいな。パパは仕事で出張だし、ママも仕事で夜中になるの。なんで私は一人っ子なのかな。」共稼ぎで夜一人で過ごす、そういう寂しさを訴えているんですね。

もう一人は小学校2年生の男子です。「お母さんが病気でずっと寝ている。朝も起きないよ。朝ご飯はたいてい食べないで学校に行くの。学校が終わったら友達の家で遊んでいるんだけど、友達の家は羨ましいな。」朝ご飯が食べられない、いわゆる欠食ですね。

さっきの子は夕飯を一人で食べている、孤食の孤ですね。子どもたちの食が本当に問題ありますね。家族が多くても、バラバラ食とか孤食、あるいは噛まない、流し込む、食事時間をさっと済ましちゃう、好きなものだけを食べる偏食、冷凍食品をコンビニで買ってきてチンして食べている。夕食がラーメン一杯、牛丼だけで副食なしの単食。そんな中で子どもたちは成長しています。その代わり清涼飲料をガブガブ飲んでスナック菓子を食べる、カルシウムや肥満の問題が出てきます。食べ方に非常に偏りがある、食の問題です。

(3) 子どもの生活構造の変化

ア 「振り子型成長構造」から「トライアングル型成長構造」へ

子どもたちの生活は、昔は家庭と学校で、家庭の回りに地域があり、学校から帰ったら、おやつを食べたり、近所で友達と会うという生活だったんですね。これを振り子型の成長と言っています。昨今ではゲームやパソコン、携帯が入ってきて、子どもたちの生活に影響を与えています。振り子型じゃなくてトライアングル型の生活になってきています。

都会のお子さんたちは、学校から帰ると早くご飯を食べて夜は塾に行く。トライアングルの下にくるヒシ型の成長構造になっています。そういう中で子どもたちは、忙しくて追われているような生活をしています。

イ 消費文化の世界の中で

消費文化の世界はどんな特徴があるのでしょうか。いつでもどこでも使ったり買ったり、好きなものが簡単に好きな時に手に入ることが、子ども達の生活が個別化してきてると、みんな勝手気ままになっているということです。

生活の個別化と言いましたが、生活行動がバラバラになってきています。その結果、学校で集団や共同で何かやるということが非常に苦手になっています。どういう風に、どの程度関わっていいのか、ということがわからない。簡単に手に入るのは便利だけど、物事を手に入れるのに工夫することがなくなっています。ちょっと面倒なことを頼もうとしたら逃げちゃうんですね。学校で先生がこれをやってと頼んでも、なかなかやってくれなくて、面倒なことを避けるんですね。

(4) 親の意識

親御さんの意識としても、少子化の中で可愛さのあまり、ちやほや育てています。自分の子どもが大事なので、他のお子さんたちのことをあまり顧みないんですね。しかし、中学生ぐらいになると手に余ってしまっていて手にかけるのが面倒になって子育てを放棄し手抜きが始まります。そんな状況の中で、人間としての基本的な躾けが十分にされないまま子どもたちが育ってきています。

今の中学生、高校生は勉強をしないですよ。目標を持って将来どこに行きたいとか、これになりたいと思っている子どもは一生懸命やっているんですが、二極化しているんです。非常に無気力で積極的にチャレンジするハングリー精神が失われてきています。

2 いま、子どもたちに必要なこと

(1) 自然との対話を

若者をどうしたら生き生きさせることができるか、今危惧しているのは子どもたちの目線、視線が非常に身近なところに集中していることなんです。空を見る目線も欠けてきて、朝日が昇るのを体験したことがない子が結構いるんですよ。都会で夜遅くまでビルの谷間の塾に行き、終わったら家に帰るんです。狭い空だけ煌々と月が照っていたり、晴れている日には空も見えるんですが、そんなの無関心ですね。

日本人は月を見て色々と想うという素敵な文化があったんですが、今の若者たちは、月を見て何かを託して物事を考えることがなくなっており、恐ろしいことです。私は仰ぎ見る山があるところで育った青年というのは素敵だとあこがれています。自然の中で遠くに視線を投げかけるということが今の子どもたちには忘れられています。

自然の持つ力はすばらしく、多くの子どもたちに味合わせることが大人の責務だと感じています。学校教育の中でも、随分前に臨海学校はなくなり、林間学校をやっているところも非常に少ないです。一頃ではスキーの修学旅行もありましたが、それも少なくなってきました。また、遠足で山に登ることもなくなってきました。今の教員は、30～40人の生徒を山へ登らせる技術を持っておらず、教員の間に伝わっていた技術が今は伝わっていません。

それからキャンプ・ファイヤーを味わったことがない生徒が結構います。私の友達は、あちこちの中学校でキャンプ・ファイヤーについての研修会を開いていますが、キャンプ・ファイヤーのやり方、儀式、歌などが学校からなくなってしまいました。学校の行事も自然がなくなっています。大地と対話させたり自然と対話させることが大事だと思っています。

(2) 「生きる力」の育成

国でも今、子どもたちに「生きる力」をつけることが大事と、教育の大きな目玉になっているわけですね。「生きる力」の育成ということで、平成8年7月の中教審議会の答申「今後の教育の基本方針」が打ち出され、新しい指導要領が改訂され継承されています。

1つ目が「自ら課題を見つけ・学び・考え、主体的に判断・行動し、問題を解決する能力」です。

2つ目が「自らを律しつつ他人と協調し他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」これはいいですね。

3つ目が「たくましく生きるための健康や体力」です。

この3つが「生きる力」と言っていますね。ただ、発表されたとき、私は非常に違和感を感じました。最初に出てくるのが、自ら課題を見つけ・学び・考え、主体的に判断・行動し、問題を解決する能力、「問題解決能力」ですよ。それは大事かもしれないですが、「生きる力」の初めに出てくるのは少しおかしいかなと。この定義は、出し方が逆ではないかと思います。たくましく生きるための健康や体力がまず先に来るべきだと思います。それから心です。私は「生きる力」の基本は心と体のスタミナ作りだと思います。最後までやり通すような忍耐力や我慢力のスタミナをつけることがまさに「生きる力」だと。

つまり人間としての自力をつけることが大事じゃないかと思います。生きて行くためには、まず単食や孤食でなく正しく食べることをきちんと教えていかないといけません。もう一つは、その食べ物を確保するためには、どうすれば良いか、どう作られているかという栽培することの大切さ、「農」という問題を教えていかないといけません。食農教育こそ人間存在の根幹をなすというふうに私は考えています。

(3) 人づくりの観点から、積極的に学校教育の中に取り入れるべきもの

今後の教育の基本としてどうしたら「生きる力」をつけられるか、学校教育の中に何を取り入れたらいいかということです。子どもたちに前向きに取り組む力や、感性を育み、体験の機会を学校で意図的に設けていかないといけません。

これからの学校教育の中に、意図的・意識的に重視する教育をしていかないといけないのではないかと思います。感性を磨くということです。

3 農業体験学習の意義

(1) 農は人をつくる

八ヶ岳中央農業実践大学校の精神に「農というのは動植物を育てて、その仕事の道程において作物を愛育し、家畜を愛撫してやっていく。その農という行為において天地の自然に教えられる。生物の愛育ということに自ら人間が教えられる。これは非常に大きいと私は思う。」「今日の学校教育は、口で学説を説き、目で学理を読み、多数の生徒を大量生産する場である。近世ヨーロッパ風の教育方法で欠けていることは、生徒が反復自習することによって自分で自得する方法をとらないことにある。

現在の学校教育の最も大きな欠陥を補うためには、教育の目的の最も大きなものである「人間を作る」という真剣な態度で農業労働をやらねばならない。」とあり、古い言葉が使われていますが、私は今の教育の中で十分通用するものだと思います。学力向上の中で忘れられているもの、農を通じての人間作りというものをもう一回みていかないといけません。



(2) 農の持つ教育力とは

農業は、栽培・飼育を通じて得られ、動・植物という生命体に水や餌・肥料などを与えることを通じて、命を見つめ命あるものを慈しむ態度を養うことができます。栽培や飼育は、手をかけ汗をかき、世話をしてやる必要があります。手を抜くと枯れたり死んでしまいます。そこから命を育てることの苦労や大変さ、地道に努力することの大切さ、勤労の精神や責任感を涵養する、愛情をかけて世話をすることを知ります。作物は人の足音を聞いて育ちます。足しげく圃場に通うことが重要なんですね。自然との関わりの中で得られるもの、光・水・土・風など自然環境への関心を深め、環境問題などへの関心も深まります。文化的な面から得られるもの、お金では味わえない農家への関心が湧いてくる、あるいは都会の子どもたちが農村に行くと、心の安らぎを感じたり関心を持つようになると言われていました。

つまり農業は命を育て、新たな価値を生み出す仕事なんですね。期待感と不安感、成就感と挫折感、何かできたときの喜び、失敗したときの悲しみ、想像力や忍耐力、チャレンジ精神とか再調整力。そういった中から知恵が生まれて粘り強さが出てくると。つまり農というのは心を鍛え、心を育み、人間的な力を呼びさましてくれることですね。

(3・4) 農業体験活動の大切さ・優れた点

私は、かつて埼玉県で農業教育センターの所長をしており、牛20頭と馬5頭がいました。本来は農業高校の生徒さんを実習させる場でしたが、埼玉県下の小中高の生徒さんと呼んで農業体験をさせたり、埼玉県内の先生を呼んで大々的に農業研修をさせました。大切なことはそういう機会を設けていくことです。

(5) 農業体験活動の目指すもの

子供たちの人間的な力や人間性を育てていくためにはどうすればいいかといいますと、感性を育むことが大切です。感性とは、物事を感じる力、感情のきらめき、いいなと、美しいなと、素晴らしいと感じる、目・耳・舌・鼻・口の感じる五感ですね。そういったものから心が揺り動かされること、これが感性ですね。単なる感覚、ただ悲しいとかうれしいとかという感受性と感性とはまた少し違いますね。どう違うのかというと、感性というのはただ美しいとか、いいなということではなく、美しさの中に価値を見出す力を秘めています。真・善・美という価値を見出すもの、それが感性で、少しでもそこに近づきたいなという思いを起こさせるものです。感性っていうのは、物事を認識する力があります。

人間の認識能力は大別して2つあります。1つは人間が物事を知るのは知的認識能力ですが、それに対して、感性的認識能力というのがあります。つまり、直感を通じて物事を認識します。目・耳・舌・鼻・口で、体験で色々なことを知っていくんですね。小さい子はみんなこれですね。これまで長い学校教育の中で、感性的認識能力は学習指導要領に出ていないと言われていましたが、やっと認知されてきています。今の学校教育は座学、教科書、先生のお話を中心できていました。日本の教育では理性的認識能力の方が高く、感性的認識能力は低く見てきたんです。感性と理性は対立するものではなく、一つの学問をする上での入り口なんだという考え方がやっとわかるようになってきました。

感性が豊かになると情緒が豊かになったり、判断力や勘、ひらめきが出てきますね。我々が何かを判断するときAがいいか、Bがいいかということになると、最後は勘じゃないですか？そういう力を育てる教育をしてこなかったんですね。



(1) 指導上の留意点

これから指導していく人には、ただ体験活動をして、作物の作り方や技術を教えるだけではダメですね。指導者は問いかけしてください。どんな形だったか、どんな色になっているか、葉にスジやトゲがあるか、何かを見つけて、探して、描いて、触ってごらん。どう感じる？と。そういう問いかけをして、注意を向けさせていくことが非常に大切です。次に生徒があった、できたと喜んだら、直ぐそこで良かったね、大きいねと共感することが大切です。よく見つけたね、すごいねという声かけと微笑みで、子どもたちは本当に生き生きし、満足感を得て自信がついてきます。先生も一緒になって共感し驚く。感情を入れてやると子どもも嬉しくなります。それから物事が終わったら必ず振り返ってください。今日どうだった？何が楽しかった？どれが良くなかった？と必ず振り返ることです。先生、僕はあれがすごく良かった、僕はこれが面白かったとみんな感じ方が違うので、友達理解につながる。ただ、漫然とやっているのではなく仕掛けを考えていくことです。

(2) 実施に向けて

今の学校では、どうも農家さんに丸投げしているところが結構あるんですね。生徒に手ぶらで行かせて、これから何かすると言ってもカマもない、何か植えると言っても種もない。なんの準備もしないところがあります。物事をするには予算が必要です。これからやるには、どうやって予算を用意するかを考えないと続いていかない。町・JAさん・青年部にお願いしたりという所が多いと思うんですが、学校でやるんなら、ある程度は教育委員会から予算を出してもらわないといけないと思います。それから先生方も全く知らないで農家に預けっぱなしというのもまずいですね。教員の研修をしないといけません。種を蒔いたら雑草も出るし、誰かが管理をしないといけません。ある学校では生徒会の中に委員会を設けて活動したり、部活動の中で活動したり、夏休みに曜日ごとに部活で分けて活動するところがありました。特に中学校では先生に時間がなくて時間の確保ができないので農業体験学習をどこに入れるのかと。最終的に農家にお世話になることが多いと思いますが、支援者をつのることが大切です。特定の人だけに負担をかけないような仕組みを作ることが大事だと思います。



最後に

農業体験学習で、子どもたちに空・雲・水・風・植物・林・地にはっている虫・あるいは蝶・蛾もいるかもしれない、夜盗虫もいるかもしれない。そういうものに対して、言葉をはかないけれど、何を語っているのかを聴くような耳を育てていただければ、ちょっと人とは違う人間が生まれてくるんじゃないかと、そんな気がしてなりません。ご静聴ありがとうございました。

浦田氏 事例発表の概要

事例発表「今『体験する』ということ」

発表者：浦田 愛氏

ふるさと自然体験塾 塾長



【プロフィール】

平成15年7月、NPO法人ほしはら山の学校 ふるさと自然体験塾長となる。四季折々の体験活動を通して五感を磨き、感性や好奇心を育てる活動をしている。

またシンガーソングライターとしても活動。財団法人ひろしまこども夢財団と東広島元気キッズ・プラン実行委員会「早寝 早起き 朝ごはん」の楽曲も手がける。

1 ふるさと自然体験塾とは

「ほしはら山のがっこう」は、廃校になった木造校舎を拠点に、2003年にスタートしました。交流宿泊施設ということで宿泊や日帰り利用したり、イベント会場としてまたフリーマーケットを行ったりしています。地域では公民館的な役割をしていて、ファックスを借りにきたりコピーをしにきたりということを今でもしております。その中で「ふるさと自然体験塾」というのが月1回のイベントとして行われています。

2 農村への憧れ

大学生の頃キャンプコンパでの出来事です。飯盒炊さんをすることに・・・仕切り役の男子が薪にどうやって火をつけたらいいのか、ナタを見た男子がこの刃物なに？と言っております。黙っていたガールスカウト出身の女の子の一人が、今日は可愛い女の子を演じることを諦めてナタを手に薪を割り初めました。その時女の子は「理想の男性は刃物が使えて火が焚ける人だ。どこにいる。そうだ、農村へ行ってみよう、そうだ、田舎が欲しいと思っていたんだ。」・・・。

3 自己紹介

先程の女の子は、都会育ちでガールスカウトでは火の付け方を知っているんですが、普段の生活ではそんな機会もなくお爺さん、お婆さんも町に住んでいたもので、何か憧れていたんですね。その女の子は実は私なんです。私は福岡市の中央区の都会で育ち、物心ついたときにはマンションに住んでおり、隣近所に迷惑をかけないように足音を立てず歩くのが小学生の時には出来上がっていました。夜もトイレの水を流してはいけないというところで、そういう時代を過ごしながら休日になると九州の阿蘇とか筑紫山園とかに遊びに行つて農村に憧れていました。

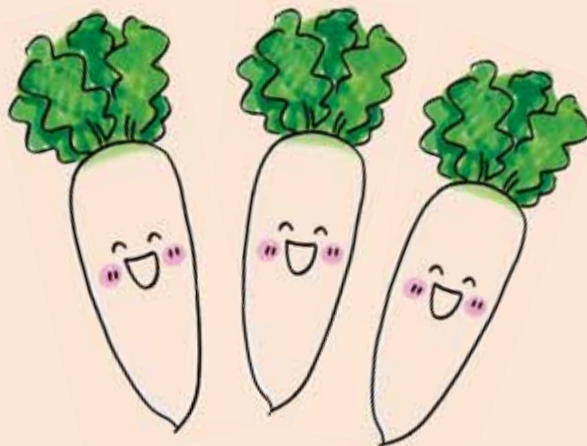
大学を卒業した時に、今しかできないことをしようと農村に留学してみたいと思いました。熱心に誘ってくださったのが平田さんで、その熱心な思いに乗せられて平田観光農園にそのまま留まることになったんです。そのころ、近辺にふる里に誇りを持つ子どもたちを育成するスクールが作りたいという方がおられ、「自遊人楽校」というのを一緒に立ち上げたり、「元気になる遊びの会社」という方が、うちに勤めなさいと言われて転職したり、また歌を歌ったりしながら暮らしていたんです。その頃たまたま農家の男性が現れて、その人が火が焚け刃物も使えたので「こんな男はいないかもしれない。」と思い結婚し、今では火が焚ける男の子を育て中で女の子もおります。



4 大根はスコップがなくても・・・

山村留学先の家のお母さんから「大根を畑で取ってきて」と頼まれました。「大根、大根、大根はどこ」畑に行ったけれども手ぶらで家に帰ってきました。

「あの～畑に大根ありませんでしたよ。」「大根はいっぱいあるわよ。仕方ないわね。一緒に行くわ。」と言って一緒に行ってくださいました。「ほら大根ここにあるでしょ。」と言われても、私には大根が見えません。葉っぱを捲つてようやく「あっ大根だ、大根って葉っぱにかくれんぼしているんですね。」と。奥さんも呆れて「大根を2本くらい採ってごらん。」と言われましたので「スコップどこですか。」と聞くと「スコップはいらないのよ、抜いてごらん。」と言われたんですが「えっ、どうやって抜くんですか。」って言ったら、奥さんが葉っぱをぐるっとまとめてぎゅっと採ったらスポッと採れるわけです、簡単に。「そうやって採るんだ。」と、23歳の大卒女子です。私生まれて初めて畑に入り、どこを歩いていいのかわからないので「ここ足入れていいんですか。」って聞きながら、「大根ってスコップがなくても葉っぱをまとめてひっこ抜くん



その時に奥さんが「大卒で学歴があっても、畑の大根1本も採れないようじゃね。」と、私も「そのとおりだな。」と恥ずかしくなりました。その時「きっと薪で火を焚けない人、畑で大根を採ったことがない人は沢山いるはず。これでいいんだろうか。」とその頃はおぼろげながら思ったんです。それから今までずっと20年間「これでいいんだろうか」と思っているんですけど、火が焚けなくても、畑で大根抜けなくても生きていけるんです。

でも、それでいいのかどうかということに疑問に感じるような体験をした方がいいんじゃないのかな、ということはずっと思い続けているんです。それでは生き抜けないじゃないかと。何かの時に生き抜けない、生き抜ける人間を育て方がいいんじゃないかなと思っています。



5 暮らすためのシゴト

じゃあそれはどこで教えてもらえるのか、ずっと考えていたら、今は暮らすためのシゴトを体験できる機会がないんじゃないかと思ってきました。カタカナでシゴトという言葉を私、最近時々使ってます。

今子どもたちの日常から実体験の機会が失われている領域があるわけです。恥ずかしながら私は、火を使ったり、畑に入ったり、田畑で種をまき育てて収穫をしたことがなかったんです。肉を獲ったりさばいたり、料理をしたことがなかった。梅干を漬けたこと見たことも、お茶を炒ったり、そういう季節の仕事をしたことがなかった。おはぎも作ったことがないということですよね。それから子守をしたことや、おんぶ紐をしたことがないから、子供を生んだときに初めてオムツを替える機会になるわけですよ。お坊さんを迎えたり、お墓参りをしたことがない、新興住宅街に住んでいたのでお寺や神社もない町だったんです。生死に立ち会ったこともないし、祭りに関わったこともない。障子がないので障子を変えたこともないし、暗闇を知らない。今結婚した場所は本当に暗いんですよ。懐中電灯のことを私は「電池」って言うんですけど、電池がないと歩けないということは、月明かりって明るいんだなという体験を、初めてあそこでしたんですね。月明かりを生かすということも知らないし。野生の動物の鳴き声も聞いたことがないし、狐は北海道にしかいないと思っていたんです。「北の国から」の影響で北海道にはいるけど、このあたりに狐がいるという認識はなかったんですね。野山の食べ物を知るという機会もなかったんです。よもぎを摘みに行こうって近所の方に誘われて、大宰府に行ったんです。よもぎは大宰府で摘むものだと思ったぐらいで、いかに変な人間が世の中にあふれているかということが、これでみなさんにもわかっていただけたかなと思います。



このように暮らすためのシゴトをする機会がないわけなんです。こういう人間が日本にあふれたらどういう未来が待っているか。恐ろしいと思われませんか。私も恐ろしいと認識しています。でもこういう暮らすためのシゴトをしている大人を見たり、手伝ったり、真似事をしたりする機会がありません。ママゴトってすごい大事な遊びの時間なんですが、ママゴトというのは包丁でこうやって、ってやってるでしょ。でも、今からはもしかしたら「チン」ですよ。それだけになっちゃいますよね。こう危機感を持ちたいなと思うんです。

暮らすためのシゴトって何なのかと思った時に、きっと稼ぎを得るためのものではないと思います。お金のためにやるシゴトではなくて、分業された1つの枠の中のものではないんです。総合的に色々なものが交わり合っているのだから分けることができないことですよね。それから、主にお金を介さずに家族の日常生活に必要な衣食住や、ボタン付けをしたりとか、村を整えたるための労働というのにも含まれるのかなと思います。

今主婦がいない。ということは、その真似をするシゴトを見る機会がないということにもつながるのかなと思うんです。それから、自然界などの関わりの中から衣食住に必要なものを得るための労働、子どもたちの遊びの中で大人のやる昔の遊びのこと、小魚を釣って川原で焼いて食べたとかいうことを聞くと、そのものが真似事であって、カタカナで言うシゴトの子ども版だったのかなと思うのです。そういう真似事をしたりする機会がない。

だけど私が今住んでいるところ、「ふるさと」と言われる場所にはまだ日常生活の中に、暮らすためのシゴトは、まだ沢山あるんです。先程から出ているのは三次市の上田町っていうところですが、上田町にはまだ薪でお風呂を焚いている家は何軒かありまして、うちも両方焚けるんです。薪で湯を沸かして、家の中に回すこともできるし、いくつも暮らしのシゴトがあります。お葬式もまだ集落で出していますし、そういった体験を学び始めることができて良かったな、学ぶ機会を持てて良かったなと思っています。そのふるさとの日常生活の中には今も沢山あるということで、縁を巡って今、私はあそこと、いろんな方々をつなぐという1つの仕事をさせていただいているのかなと思います。



6 ふるさと自然体験塾への想い

お茶園もあれば、森や田んぼも畑もあるんですけど、それが暮らしとつながっている場所にあるというのが、私たちがやっている体験の意味というか、体験農場ではなくてそれぞれに持ち主さんがいらっしゃって暮らしの中のひとコマであるということです。私がガールスカウトでやっていたのは、非日常の中での野外体験だったんです。そうじゃなくて日常の中の暮らしのひとコマっていうシゴトを体験させてもらうというのが、これからやりたいことだなと思っているんです。

それから、ふるさとという場所が今、絶滅危惧というふうになっていると思うのですが、暮らしのひとコマを体験しようと思ったら、ふるさとが保たれていなければ出来ないということで、ふるさとを守るということが同時に必要だということを沢山の方が実感していただくような機会があったらいいなとも思って交流を行っております。

ふるさと自然体験塾を少し詳しくお話すると、運営は参加費を主な収入源にしているので、運営自体はとても厳しくて、NPO会員の会費から支援をいただいたりしております。まず参加者がいなければ始まりません。それから「ゲンチジン」って言っているんですけども、これがリアルさで、日常とつなげるところですね。地元の方々に大変快く協力をしていただいております。そしてつなぐ役として県内外の体験スタッフや、大学生のガキ大将や、時々専門の講師に来ていただいたりして、学びあいの場を作っています。誰かが一方的に教えるのではなくて「お互いに学び合おうよ。」ということで「ゲンチジン」と言っている方々も「わあ、うちの町ってそういうことが良かったんだ」ということが、外からの声で再認識できる機会にもなっているのでしょうか。お互いに学び合えたらいいなと思っています。

ふるさと自然体験塾では、シリーズが2本ありまして「美味しい学校シリーズ」っていうのが主に食農の部分で、田んぼとそば畑と時々お茶畑をやっています。「森作りカフェ」というのは、森作り、里山を作っています。こんな小さい子も真似事をして…。それから草刈機を使っているところを小さい子が見て「サンタさんに草刈機を頼んだ。」「大人のそういう仕事をやる姿って格好いいんだな。」と感じてもらえたらいいと思います。キャンプは心の中に入ってくるというか納得する時間っていうのが欲しいなと思って7泊8日でやっているんですけど、とても大変なのでいつまで続けられるのかなと思いつつ、参加者の方から「いつですか。」「はい、やらなきゃ。」っていう感じで、体力を作りながらやっております。最後には、涙を流してお別れをするようなシーンもあったりして素敵な時間です。こういったことを学び合いの中でしながら、私もたくさんのことを学ばせていただくんですけど、詩をつくったので読ませていただきたいと思います。



『野に生きる 野生を持て 海・山・川をみて そこに棲むものたちの姿や匂い 四季の食べ物のありかが 心や身体に染みた人間になれ 石・木・水をみて そこから暮らしを 創造できる手をもつ人間になれ 大地・空・瞳を見て その喜びや悲しみの表現を 感じ取れる人間になれ』

こんな気持ちで体験塾をやりたいなと思います。「人間になれ」と言っておりますけど、こんな人間になれたらいいなという自分自身の思いもあります。きっと死ぬまでなれないんじゃないかなと思うけれども、こんな人間素敵だなんて思いながら書きました。体験塾を通して未来の子どもたちに暮らすための仕事ができる機会をつなげたい、それから五感を通して自然と暮らしを体感することで、自然や町やふるさとを愛す豊かな感性を育んでいけたらいいなと思っています。

7 ふるさとを愛する豊かな感性

ふるさと自然体験塾を通して未来の子どもたちに暮らすための仕事ができる機会をつなげたい、それから五感を通して自然や暮らしを体感することで、自然や町やふるさとを愛す豊かな感性を育んでいけたらいいなと思っています。先ほど蕪木先生の方から、感性というのが生きる上でどんなに素敵なことか、というお話が沢山出たけれども、私も感性というところにすごく関心があります。その感性に関心があるというのがこの歌の中に表れているかなと思うので、ちょっと歌を歌ってみたいと思います。



『歌・生きている鳥たちが 生きて飛びまわる空を あなたに残しておいてやれるだろうか 父さんは 目をとじてごらんない 山が見えるでしょう 近づいてごらんない こぶしの花があるでしょう』



「目を閉じて山は見えない。」という子どもたちもいると思います。普通に見れば山はあるんです。だけど、その山を体験したことがあったら山はより見えてくるというか、目を閉じても思い返すことが出来るという。こぶしの花も春になったら一番に咲き始め、山が段々ポツポツポツ白くなっていく、なんかドキドキするような季節ですね。

この歌は知っていたんですけど、こぶしの花を上田町に住むまで知らなかったんです。知らないで歌うのと知っていて歌うのは全然変わってくるんですよ。「あ、こぶしだ。」と色々なことが入ってきて歌を歌える。同じように田んぼの泥に一度足を入れたことがあったら、田んぼを見るだけで、泥の感触を思い出し、田んぼを作っているお爺ちゃんの顔を思い出すことができます。田んぼの横の川で「どんこ、カワムツ、カニ、ヤゴ、トノサマガエル、おたまじゃくし」を捕まえたことがあったら、小川を見るだけで生き物を思い浮かべることができます。しかもイモリが手の中でニョッとする感触を、今触ってなくても一緒に思い出すことができます。やったことがある方なら今手の平に思い出せると。畑のキュウリをもらったことがあったら、キュウリのチクチクした感じ、黄色い花の感じ、畑の土を足で踏んだときの感触を思い出すことができます。

目を閉じてごらんなさい、山が見えるでしょ、近づいてごらんなさい、こぶしの花があるでしょ。目を閉じたら山が見える、キュウリもかじるときに畑が思い返される、足のそこに感触が思い出せるというのは「何て豊かなことだろう。」と。これが感性と知っていると、感じるものがつなぎあった豊かさだなと思います。『ふるさと』という文部省の唱歌があります。『どこかで春が』という唱歌もあります。これが感覚的に理解できる日本人が、今、絶滅危惧になっています。私も絶滅危惧からちょっと這い上がったような状態なんです、『どこかで春が』いいですね、どこかで水が流れ出す、ヒバリが鳴いている、芽が出る音がする。芽が出る音なんて知らないんですけど、パチパチパチパチしているような気がします。感覚を知っていて歌える日本人がやっぱり残っていて欲しいな、今からずっとつなげていきたいなと思って。『ふるさと』という歌も、ウサギおいしって、ウサギが「美味しい」ではなくてウサギを追っていたんだということが、分かる日本人をつなげていきたい。そのためには、やっぱり体験だと思うんです。読んでいただきたいと思う詩があります。『子供の生まれながらの権利』、子供が体験する権利を持っているという詩があります。

『その体験をしたからこそ、若いころにそういう体験をしたからこそ自然、小説、歴史、絵それから音楽ですら、すみずみまで理解し、そのよさを味わうことはできるのである。』

という詩なんですけど、私はそのとおりだなと思います。豊かなふるさとや自然の体験を子どもたちに、次は次の世代に豊かな環境を引き継ぐ選択ができる大人になるために体験をというふうに思います。1つ1つの選択をする時に、次の世代にふるさとや自然環境を引き継いでいけるかという優先順位が、そっちにいけるような大人に育ってほしいなと思います。そうしないと自然から人間が見放されてしまう。人間がいなくなると自然はやっていけるんです。しかし、人間は自然がないとやっていけないということを、しっかりと体験として知っている大人を増やしていきたいと思います。最後に、「ふるさと」という感覚を知っているみなさんと一緒に『ふるさと』を歌って終わりできたらと思います。ありがとうございました。



（小学校業務員）

学校で農業体験の話があったんですが、先生たちの実態は蕪木先生が言われた状況より悪く、話にならないです。例えば学校の畑で色々な農作物を作ったりしますが、作り方を知らない先生が教えており、作り方を教えてもやろうとしません。それが現状です。学校に田んぼがある時もあったんですが、田植えをして後は稲刈りをするだけ。田植えも植えた後は3分の2はこちらで直して、後の一切は全部自分がやっていました。先生方には、教員免許を取る時にそういうことを教えるしかないと思います。何しろ虫も触れない先生が多いです。田んぼの中には、稲によく似た草が生えていますが、草抜きを頼もうにも区別がつかないので任せられない現状です。やっぱり今の現状を変えるには教員資格の中に組み込まないと無理だと思いますが、先生のご意見はどうか。



（蕪木氏）

全くその通りです。私が、平成8年に学習指導員になって、総合的な学習の時間というか、学校の中に取り入れられるようになるということで、学校としての農業体験学習、食農教育というのが言葉として出てきたのがそのころなんです。私は農業教育センターの所長も兼ねていましたので、これからは食農教育、農業体験学習を、もっと学校の中に取り入れたいということで、先生方の実態をよく考えてみると、今言われたように、先生方もみんな同じなんです。そういう人たちに農業体験学習の指導をしろと言ってもお話の通り無理なんです。少しでも注意や意識を向けてもらうために、圃場のすばらしさ、青空のもとで何があるのか先生方に感じてもらいたいということで、教員の農業体験学習の指導者講習会というのを大々的にやったんです。すぐ帰って指導ができるかという、全く作物を作ることはできないことはわかっているんですか、意識を向けられる先生をまず育てなければならぬということでやりました。それが功を奏したわけではありませんが、埼玉県では1学校1農園という運動が起こり、何とか今、それを維持しようとしています。そういうのが出来るようになったのも、私どもが種を蒔いた教員にそういう授業の大切さを説いてきたからこそです。ですから言われる通り、農業体験学習を本当に必要とするならば、教員になるために文科省が必死になって、農業体験指導者講習会をする運動でもしないと厳しいと思います。その授業を受ける人たちには、色々なところに体験農園がありますので、借りてでも1週間ぐらい思い切ってやるべきです。先ほど申しましたように、先生方は忙しくて時間が取れないというのが本音なんで、それを何とかしないとイケないし、先生が全てやるのは無理ですから、支援者をうまく組織化していくということがこれから大事だと思います。

（行政職員）

学校の教員にそういう指導を求めるということがありましたが、実際教員に今以上のことを求めるというのは難しいと思います。体験については時間がかかるので、学校教育の現場で1週間とか1年とか研修を受けたところで指導ができるというわけではないと思います。実際、行政の方でも登録制で指導ができる方というのは沢山おられるので、専門家の方を総合学習の場で呼ぶというのが一番望ましいと思います。実際は学校側も予算や時間がないので専門家を呼べないという現状なので、まず学校側の意識改革と予算の確保というのが課題だと思います。2人にお伺いしたいのですが、30代、40代の私たちが親になっている世代は全然自然体験していないので、関心がある親であれば子供をそういった場に連れて経験をさせることができますが、一番大事なのは意識がない方にどのようにコンタクトをとっていくかということです。一般の方でなら親であったり、蕪木先生がされているような教員への意識を変えていくために指導されているということだったんですが、コンタクトの取り方っていうのを、どのようにされているのかということをご教授いただければと思います。



(蕪木氏)

予算がないという話、確かにそうなんです。学校が何かやるという時に、教育委員会に予算をもらいたいという話をもっていきます。ところが教育委員会は財政自主権・財政基盤がないんです。ですから教育委員会が何かしたいと思っても、それができないというのが今の日本の教育システムなんです。何かをしようと学校が教育委員会に予算をくださいと言っても、なかなかできないのが事実です。それは、国も行政の仕組みを変えなければいけないと思います。それから次の話で、全く自然に関心のない親御さんたちを、どういうふうに意識付けするか難しいです。町内会でもよくやっていますが、そういうところになかなか参加する人が少ないですよ。しかも土日でも色々と用事があったりして、出来ないというのが事実なんです。今の日本の文化の質の問題もあると思いますが、もっと農泊やホームステイしたり、あるいは農家に日帰りでもいいから行って何かをするような、そういう何かするすばらしさを理解させるような施策がないと難しいですね。そのためには、国、あるいは地域や地方もどっかで目覚めていかないと、町長・県知事、もっと言えば総理大臣にです。そのためには、親御さんにも良さを分かってもらうようにしないといけないんです。そういう講習会などをしていくことも大事だろうし、もっと言えば今日のこの会議もそのためのものだと思います。ただ、今日来られている皆さん方は、既に重々承知されている方が多いと思うんですね。だけど、それ以外の人たちをどうやってここまでもっていくかというのは、なかなか難しいんだと、正直言ってね。



(浦田氏)

同じような話を仲間内ですることもあって、今、朝読という時間があるんですよ。朝読書をするという時間が設けられていて、これは私が子供時代にはなかったんですけど、いつから始まったのかな。

10年ぐらい前ですか。それで読書をする子供がすごく増えた、確かに増えています。この朝読は10分、15分でできるんだけど、じゃあ自然体験は10分、15分でできるかっていったら、ちょっと難しいところがあるかも分からないけれど、朝読に変わるモーニングネイチャーみたいなのが、月に1・2回、キャンペーンでやるぐらい国が本気を出してもいいんじゃないかなと思うくらい、自然体験は必要かなと思っています。今ネイチャーゲームに関わっているんですけど、ネイチャーゲームだったら30分で1プログラムというのは可能なので、そういった積み重ねの中で自然に目が向くような子どもたちを育てていくっていうチャンスを作っていくというのは必要なことだと思っています。始められるところから始めていきたいなというふうな話をしていたところです。